

千葉県鴨川市嶺岡山脈東部の地這りと土地利用

木 全 令 子

(1) 論文の目的

地理学の立場から「災害」という問題を取りあげる場合、単に地震とか火山の噴火などの現象を究明するのではなく、それらの災害がどの様に分布しているのか、自然環境との因果関係はどうか、あるいは人間生活との関わりがあるのかという様に、もっと広い観点からとらえていくことが必要であると思う。「地震が怖い」という単純な理由から「災害」というテーマを卒論に考えた時、人間生活と最も関わりが深いのが「地すべり」ではないかと考えた。というのは、たとえば地震とか噴火という現象はいわば突発的なことであり、その時点で人間生活に大きな影響を及ぼすかもしれないが、長年の間には忘れられてしまう。しかし、地すべりは特に目立った被害はなくても日常茶飯の現象なので、人間生活と密接な関係があると考えられるからである。そこで卒論では房総半島に発生している地すべりを採り上げ、特に嶺岡山脈東部の地すべりを中心に地すべりの要因や類型を考察し、あわせて人間生活との関わりを検討した。

(2) 要 約

房総半島中南部鴨川から保田にかけての地帯で地這りが多発している。房総の地這り地帯は、丹沢一嶺岡構造帯の影響で東西性の山列と水系が発達し、地質構造も複雑で断層褶曲が多くみられ、火成岩（蛇紋岩・玄武岩 etc）の貫入を伴う。地這りは西部では第三紀層丘陵の山麓部分、東部では老年期的な嶺岡山脈の斜面に山頂付近から発生している。特に嶺岡山脈南斜面の滑動が顕著である。房総半島では断層作用や破碎作用・火成岩貫入などの運動で地層が剪断され、岩石が弱化していると思われる地域に地這りが限られている。そのため地質構造が複雑であることが、房総地這りの第1の要因となっていると考えられる。また第三紀層を貫く火成岩、特に蛇紋岩の性質が直接地這りを起こす原因ともいわれている。

一方、嶺岡山脈東部の曾呂地区の地這りを詳細に検討した結果、今まで房総地這りと一括されていたものの中に、いくつかの類型があることがわかった。土石流に類似した水平的移動の顕著な「流動型地這り」、ごく一般的に発生している速度の遅い「クリープ性地這り」、あるいは地這りというより山崩れや崖崩れに分類される崩壊など、いくつかに分けることができる。どのタイプも先に述べた地質的素地が第1の要因となるが、直接に地這りを発生させている要因はそれぞれ違う。しかしいずれにしても、蛇紋岩と頁岩・泥岩などの泥質岩の分布が、地形環境に応じていろいろなタイプの地這りを発生させていると思われる。房総地這りは「蛇紋岩地這り」と呼ばれることもあるが、タイプによっては直接に蛇紋岩が地這りに関係していないこともあるので、一括してこう呼ぶことには問題があると思う。

ところで、地這り地帯には特殊な土地利用形態が展開されることが多い。たとえば水田が山頂付近まで続いていることが多いが、これは地這りの先端部に水が豊富であるということが作用している。また地這りの被害のため家屋を移したり、地目を変更したという例も多い。更に地這りによって作ら

れる斜面の微地形と土地利用（水田の分布・集落立地など）の結びつきが強く、地じりと土地利用は密接に関わっていると考えられる。しかし土地利用決定因子の中での「地じり」の位置は、それほど高くない。地元の人にとっては、地じりという現象が日常茶飯のことなので、生活に溶け込んでしまい、ふだんはほとんど意識していないということであろう。

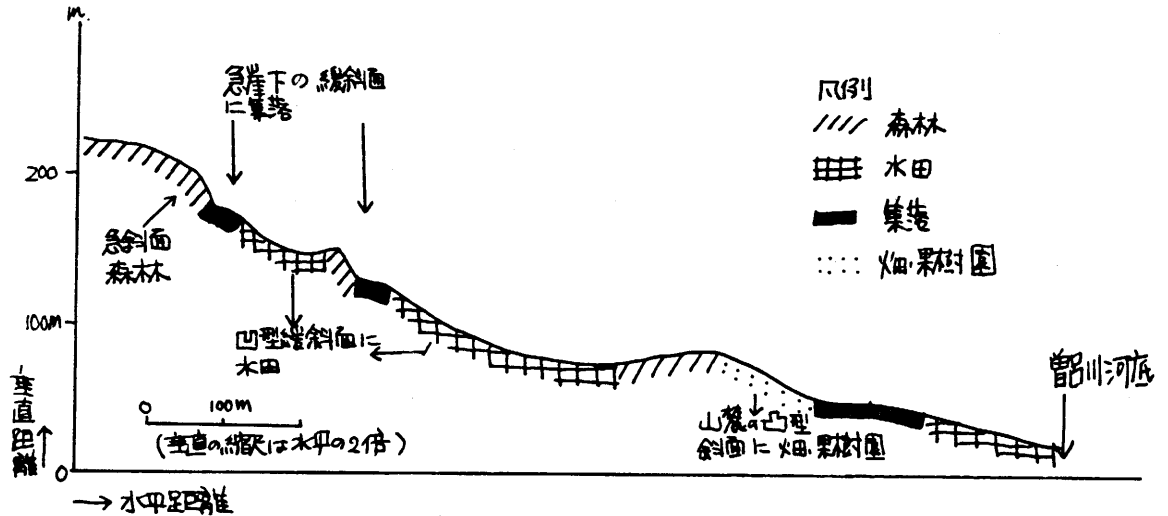


図1 地じり地の地形断面と土地利用（断面図 1:25000 鴨川の地形図より作成）

長野県鬼無里村の過疎現象に関する地理学的考察

久保田 美子

長野県上水内郡鬼無里村は、長野市から北西へ約20km、バスで1時間ほどの距離にある山村である。周囲を1,000 m級の高山に囲まれ、裾花川（犀川の支流）およびその支流に沿ってひらかれた緩傾斜地に、点々と集落が散在している。

鬼無里村の急激な人口減少は昭和30年ごろから始まるが、35年から40年にかけての減少は特に急激であった。45年から50年にかけて、一時かなり鈍化したが、最近また激化する気配も見えている。このように急激な人口減少のうち、最も深刻なのが若年層の流出である。それが出生率の低下を招き、ついには人口の自然減少が始まり、高齢化が深刻になるという結果をもたらしている。転出先は長野市が圧倒的に多い。人口減少の地域差では、おおむね、村の中心からはずれた地域、それも長野市から遠い地域の減少が著しいといえる。

このような人口減少をもたらした要因はさまざまであり、複雑であるが、次のような事柄が考えられる。すなわち、第三紀層の代表的地すべり地帯のひとつであることをはじめ、積雪などのきびしい自然条件、戦前まで村の商品経済を支えた大麻生産とそれにとまう冬仕事としての畳糸製造が、輸入麻および化学繊維の発展に押されて衰退した後、それに代わる農業生産としてタバコ、野菜類、キノコ、山菜類の栽培、畜産などが行われているが停滞気味であること（それにとまう農家の兼業